

平成 21 年 4 月 30 日現在

研究種目：基盤研究 (B)

研究期間：2006～2010

課題番号：18330137

研究課題名 (和文) 「心の理論」の獲得と実行機能の発達

研究課題名 (英文) Acquisition of "theory of mind" and development of executive function

研究代表者

子安 増生 (KOYASU MASUO)

京都大学・大学院教育学研究科・教授

研究者番号：70115658

研究分野：教育心理学

科研費の分科・細目：心理学・教育心理学

キーワード：心の理論, 実行機能, DCCS, 抑制制御, 認知発達, 幼児, 自閉症

## 1. 研究計画の概要

(1) 本研究は、認知過程の生涯発達の領域において、今後 10 年間で最も重要な研究テーマであると考えられる「心の理論」の獲得と実行機能の発達の関わりについて、子安増生 (京都大学; 研究代表者)・別府哲 (岐阜大学)・木下孝司 (神戸大学)・郷式徹 (静岡大学) の 4 人の発達心理学者により、実験的研究法、多変量解析法、事例研究法等の方法論を併用しつつ、総合的に研究を展開するものである。

(2) 国際的な水準の研究を実施するため、この分野を主導する世界的な研究者である Prof. Charlie Lewis (Lancaster University, UK)、Dr. Claire Hughes (University of Cambridge, UK)、Prof. Philip D. Zelazo (University of Minnesota, USA)、Dr. Stephanie M. Carlson (University of Minnesota, USA) らの発達心理学者と連携をとり、研究の一部を Prof. Lewis との国際共同研究ならびに Dr. Hughes との国際共同研究として実施する。

(3) この研究を通じて、子どもたちの他者理解や対人コミュニケーションを支える認知発達過程を明らかにし、他者理解や対人コミュニケーションに困難さや障害をかかえる自閉症の子どもたちの発達援助のための理論的基礎を構築することを目指すものである。

## 2. 研究の進捗状況

世界の発達心理学者との連携は、2つの国際会議と2つの共同研究で推進してきた。

(1) 国際会議の一つは、京都大学 21 世紀 COE のサポートにより 2006 年 1 月に京都大学で開催された国際セミナー「心の抑制機

能」において、研究代表者 (子安) が企画に関与し司会者を務めたセッション「抑制機能の発達」において、Prof. Zelazo と Dr. Carlson の発表および Prof. Lewis のディスカッションとして実施した。

もう一つは、京都大学教育研究振興財団の資金を得て研究代表者が 2007 年 12 月に京都大学で開催した「心の高次制御機能に関する国際シンポジウム」であり、Dr. Hughes、Prof. Lewis、および子安の発表として実施した。

(2) Prof. Lewis との共同研究は、実施が完了し、成果を英語の書籍にまとめたほか、論文を投稿中である。また、Dr. Hughes との共同研究は、イタリア、オーストラリアの研究者との共同研究に発展したため、2008 年のドイツでの学会で企画会議を行い、今年度を実施する予定である。

(3) 子安の研究は順調に進捗し、『発達心理学研究』の 3 論文にその成果をまとめている (小川・子安, 2008, 2009; 溝川・子安増生, 2008)。

別府の研究では、話し言葉を持たない自閉症幼児の参与観察資料をもとに、心の理解と情動調整の関連を検討し、アタッチメントの発達と関連を明らかにしている。

木下の研究では、反応抑制が必要なものとして秘密に着目し、日常保育場面におけるその生起場面を分析した結果、小声で話すなどの振る舞いは 3 歳前後で確認できるが、情報保持は 4 歳以降であることを明らかにした。

郷式の研究では、誤信念課題と誤写真課題を保育園児 (3～5 歳児) に実施し、課題 (誤信念課題、誤写真課題) × 刺激の提示方法 (位置変化条件とアイデンティティ変化条件) × 年齢の交互作用を見出している。

### 3. 現在までの達成度

<区分>

①当初の計画以上に進展している。

<理由>

研究計画の概要に示したことの大部分は、平成20年度までにかかなりの部分が達成され、その成果は既に下記「代表的研究成果」の①～④の4編の論文ほかにまとめている。

また、残る Dr. Hughes との共同研究は、プロジェクトの規模を拡大し、今年度を実施する手筈を整えている。

### 4. 今後の研究の推進方策

研究計画の変更などは特に必要がなく、当初の予定通りに、引き続き研究を実施する。

これまでの研究成果の報告を論文にまとめつつ、Dr. Hughes との国際共同研究の実施を推進する。

### 5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計20件)

- ①小川絢子・子安増生 (2009). 幼児期における他者の誤信念に基づく行動への理由づけと実行機能の関連性. 発達心理学研究. 印刷中.
- ②Koyasu, M. (2009). Young children's development of understanding self, other, and language. *Kyoto University Research Studies in Education*, 55, 1-13.
- ③溝川藍・子安増生 (2008). 児童期における見かけの泣きの発達: 二次的誤信念の理解との関連の検討. 発達心理学研究, 19, 209-220.
- ④小川絢子・子安増生 (2008). 幼児における「心の理論」と実行機能の関連性: ワーキングメモリと葛藤抑制を中心に. 発達心理学研究, 19, 171-182.
- ⑤子安増生 (2006). 幼児教育の現場におけるパーティシペーション. 心理学評論, 49, 419-430.

[学会発表] (計30件)

- ①小川絢子・子安増生 (2009). 幼児期における「心の理論」とワーキングメモリの関連—不意移動ストーリーの語りなおしに着目して. 日本発達心理学会第20回大会論文集, pp.598.
- ②小川絢子・子安増生 (2008). 幼児期における他者の誤った行動に対する理由づけと実行機能との関連性. 日本教育心理学会第50回総会発表論文集, p.599.

③Mizokawa, A. & Koyasu, M. (2008). Children's understanding of false belief about apparent crying: Association with the acquisition of recursive thought. Poster presented at the 20th Biennial ISSBD Meeting (The International Society for the Study of Behavioural Development), July 13-17, 2008, The Congress Centre Würzburg, Würzburg, Germany. Programme, p.101.

④Koyasu, M. (2007). Young children's development of understanding others' mind: From perspective-taking to theory of mind. Paper presented at the 37th Annual Meeting of the Jean Piaget Society, May 30-June 2, 2007, NH Grand Hotel Krasnapolsky, Amsterdam, The Netherlands. pp.25-27.

⑤小川絢子・子安増生 (2006). 幼児期における「心の理論」と実行機能の関連性. 日本発達心理学会第17回大会発表論文集, p.240.

[図書] (計20件)

①Lewis, C., Koyasu, M., Oh, S., Ogawa, A., Short, B. & Huang, Z. (2009). *Culture, executive function and social understanding*. In Lewis, C. & Carpendale, J.I.M. (Eds.), *Social Interaction and the Development of Executive Function* (pp.69-85). Monograph in the series *New Directions in Child and Adolescent Development*, Issue 123. San Francisco: Jossey Bass.

②Ando, H., & Koyasu, M. (2008). Differences between acting as if one is experiencing pain and acting as if one is pretending to have pain among actors at three expertise levels. Itakura, S., & Fujita, K. (Eds.), *Origins of social mind: Evolutionary and developmental views*. Tokyo: Springer. pp. 123-140.

③木下孝司 (2008). 乳幼児期における自己と「心の理解」の発達. ナカニシヤ出版.

④子安増生・田村綾菜・溝川藍 (2007). 感情の成長: 情動調整と表示規則の発達. 藤田和生 (編), 『感情科学』, 京都大学学術出版会. pp. 143-171.

⑤子安増生 (2007). 「心の理論」とメタファー・アイロニー理解の発達. 楠見孝 (編), 『メタファー研究の最前線』. ひつじ書房. pp. 61-80 .

[その他]

研究代表者のホームページ情報:

<http://www.educ.kyoto-u.ac.jp/cogpsy/members/koyasu.htm>